



TITLE:

<訃報> 佐伯富教授の訃

AUTHOR(S):

夫馬, 進

CITATION:

夫馬, 進. <訃報> 佐伯富教授の訃. 東洋史研究 2006, 65(2): 349-349

ISSUE DATE:

2006-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/138189>

RIGHT:

訃報

佐伯 富教授の訃

京都大學名譽教授であり、長年にわたって東洋史研究會の副會長をつとめられた佐伯富先生は、二〇〇六年七月五日逝去された。享年九五歳。

先生は一九一〇年（明治四三年）に名利萩原寺に生まれ、香川縣立三豐中學校、第六高等學校をへて、京都帝國大學文學部史學科に入學、一九三五年に卒業、まもなく東方文化學院京都研究所研究囑託となられ、その後東方文化研究所助手に昇進、さらに京都帝國大學人文科學研究所助手に配置換え、一九四二年に山口高等商業學校（現山口大學）教授として赴任された。終戦ののち、一九四九年には京都大學文學部助教授に迎えられた。一九五七年教授に昇進して東洋史學第三講座を擔當され、一九七四年定年退職ののち京都大學名譽教授となられた。先生の學界における功績として本誌でまず特記すべきは、先生が東洋史研究會の發展に大きく貢獻されたことである。その機關誌『東洋史研究』第一卷第一號は一九三

五年に産聲をあげるが、その「編集後記」に掲げる研究會同人（會員）三十名の中にすでに先生の名前が見える。その第三卷第五號は自ら責任編集に當たられたものである。

しかし東洋史研究會に對する先生の特別な貢獻は、何と言っても戦後になって東洋史研究叢刊の發行が始まってからである。その第一冊が一九五六年に出版されてから一九七三年にすべての業務を同朋舎に委託するまで、その編集から販賣、會計に至るまですべてを京都大學東洋史研究室で行っていた。先生はこの實務擔當の總責任者をつとめられ、この叢書が世界の學界で定着するのに多大の貢獻をされたのである。

先生の専門は中國近世社會經濟史であった。『東洋史研究』第二卷第三號には先生の「陶希聖著作目録附略傳」が見える。これは「現代支那名家著作目録」シリーズの一つであったが、先生が陶希聖について執筆することを擔當されたのは、當時から社會經濟史家と目されていたことを示している。『宋代茶法研究資料』が東方文化研究所から出版されたのは一九四一年のこと、先生はこれを「現在で言えば修士論文にあ

たります」と誇らしげにおっしゃり、我々を激勵されることがあった。

その中でも先生のライフワークが何であるかと訊かれれば、誰もが中國鹽政史の研究であったと答えるであろう。自嘲を少しく混じえつつしかし自恃の氣持ちを表された言葉、「中國の鹽政を研究する者は鹽馬鹿（鹽糊塗）といわれます」は、我々受講生であれば誰でも一度や二度は先生からお聴きしたし、先生自身何度かお書きになっている。一九四三年に公表された「鹽と支那社會」（のち「鹽と中國社會」）は必ずや先生の自信作の一つであったに違ひなく、現在から見てもいささかもその輝きを減じていない。これを出發點とする研究はその後半世紀近くをへて『中國鹽政史の研究』となつて結實し、これによつて一九八九年、恩賜賞・日本學士院賞を授與された。最晩年には、山西商人の通史的 연구に情熱を燃やされたが、これは宋代まで公表されたところで惜しくも絶筆となった。

篤實そのものという先生であつた。先生の教えを直接に受けられたことを、人生においてまことに有難いことと思う。御冥福を祈る。

（夫馬 進）